

研究代表者 所属・職：社会福祉学部・教授

氏 名：湯原 悦子

研究課題名：音楽アウトリーチ企画を通じた障害児者支援の質向上

研究の概要

2020 年春からの新型コロナウイルス感染拡大に伴い、福祉施設におけるボランティアの活動が制限され、利用者が楽しめる余暇活動は激減した。施設職員は何とか利用者に日々を楽しむ機会を提供したいと考えているが、多忙な業務の傍ら企画を立案、実施するのは難しい状況にある。

報告者は 2018 年から愛知県内の福祉施設を対象に、プロの音楽家を派遣し、コロナ感染防止に配慮したうえで音楽を提供するアウトリーチ活動を行ってきた。そして今回、本研究に参画いただいた社会福祉法人むそうにおいては 2021 年度にコロナ感染防止に配慮しつつ、福祉施設利用者の余暇充実を狙いとし、質の高い音楽を楽しめる機会を創造することを目的に、音楽会を 3 回企画し、実施した。その効果として、職員が利用者理解を深め効果的な支援策の提案につなげた、家族が本人の音楽好きという新たな一面を見出した、プロの音楽家たちが演奏活動を通じて福祉に関心を持ったなどの効果が得られた。総括においては単発の企画だと限界があることが語られ、お互いの理解が進んだ今、それぞれの専門性を持ち寄ることにより、さらによい企画を立案していくことができるのではないかと提案があった。

そこで本研究では、社会福祉法人むそう職員、プロの音楽家、研究者が協働し、利用者および家族の QOL 向上、支援の質向上を目標とした音楽アウトリーチ企画を立案・実施し、その効果を検証することを目的とした。研究方法について、アクションリサーチの手法に従い実践と振り返りを行った。また、企画終了時に毎回アンケートを実施した。年度末には企画者間（職員、アーティスト、湯原）でのグループインタビューを行った。

達成状況・成果内容

1. 企画立案

これまでの経験を踏まえ、2022 年度のテーマを「いろいろな音楽の楽しみ方がある」ことへの気づきとし、音楽のいろいろな楽しみ方を模索することにした。内容&構成としては、参加者の集中できる長さが 10 分くらいのため場面が切り替わるよういろいろなコーナーを設ける、プロ奏者の演奏を聴く時間も設ける、音楽に合わせて盛り上がる（歌ったり踊ったり、楽器を鳴らしてみる）コーナーは今年も実施することを確認した。

2. 研究結果

今回の音楽アウトリーチ企画が障害児者支援の質向上において、どのような効果があったのかを確認した。

1) インタビュー

①本人、家族への効果

三組の家族に音楽会終了後、感想をお聞きするインタビューを行った。

ケース1 利用者と家族（母親）

第1回、第3回の2部に参加。

本人について、第1回の際は施設のなかに入ることさえできず、入口の外で泣いていた。しかし演奏がはじまると共に自発的に前に出て、友人とダンスを披露。皆から大きな拍手と大喝采を得る。第3回では踊りに加え、歌も披露してくれた。音楽会終了後には「また、出たい」と言っていた。

・母親へのインタビュー

受け入れてくれる雰囲気がいよ。こういう情勢だし、余暇の充実が課題。歌もダンスも発表会以外になかなか披露する機会ない、こういう場があるとよい。本人はうれしいと思う。

この子は歌もダンスも自分に自信がないと前には出ない。前は一緒に踊ってくれる友達が誘ってくれたが、今回（第3回）は一人だった。今日はいきなり生演奏に合わせて踊ったが、たまたま前にそのアーティストのコンサートに行っていたのでうまく踊れた。（傍らで本人が「楽しかった～」とほえむ。）

ケース2 利用者と家族（父親、母親）

第1回～3回の2部に参加。本人に今日はどうだった？楽しかった？と聞くと、「はい」「よかった」と即答した。

・母親へのインタビュー

いつも参加しているのでパフォーマンスの質が向上した。本人は合唱団に入っている。音楽が好きで、いつも youtube で曲をチェックしている。今回もすごい練習していた。カラオケレベルなのにプロの方の生演奏をバックに歌わせていただけるなんて、めったにないこと。本人がいきいきと歌っていた、カラオケと異なり、声も大きくなっていて。今回、ピアニストがミスチルの歌詞に感動した、という話を聞いて、私自身も感動した。アーティストの人となりに関心を持った。ピアニストがバリバリの音大出であることに驚き、この3人の演奏をまた聴きたい。

本人が（音楽会に）行くと言ってくれるので、家族で外出できる。昼間でないと家族で参加できないから、昼で助かっている。

・父親へのインタビュー

リクエストコーナーがよかったね。いろいろな参加の仕方があるのだと思った。次回はリクエストしようかな。回を重ねるごとにだんだんと盛り上がって、親しみやすくなってきたと思う。家族で歌うのもよい、栄光の架橋はよかったね、コーナーとして盛り上がったね。

ケース3 利用者家族

第1回～3回の2部に参加。

・本人（施設利用者の妹）へのインタビュー

プロをバックに歌うことができ、楽しかった。人前で歌ったりする機会がなかったので、1回目のときすごく緊張して、今回も緊張したけど楽しいなと思った。人前での緊張が減っていくのがよかった、2か月に1回のペースなので、ちょっとうまくいかなくてもすぐにリベンジの機会が来たのもよかった。リクエストコーナーで皆が参加できるのはよいこと。

・母親へのインタビュー

(この間)、家族で出かけることが本当になかった(本人はマスクをつけられないから出かけられるところがなかった)。出かけることができ、よかった。本人も楽しい、新しい経験ができた。新しい経験が本人によい影響を与えていると思う。この音楽会は、姉妹で参加できるよい機会である。新しい曲でなくても、他の方の選曲を見て、古い曲でもいいんだとわかった。選曲も自由にできることが分かった。歌でなくてもいいことも分かった。企画を続けていくことによって、その場に慣れることができる。トイレの場所とかも分かると、行こうと思う。

②アーティストへの効果

グループインタビューの形で全体の感想をうかがった。

a. 全体の感想

・参加者の表情がすごく変わるのが印象的、うれしそうな顔になったり泣きそうになったり、見ていてやりがいがある。前に出て歌うって普通、ハードル高い。ここが発表の場、貴重な拍手を受ける場、お客さんにとっても輝ける場となっている。勇気づけられる。やってもいいんだという雰囲気、やりきる姿、ガッツのある精神を自分も持っていなきゃなって。変なミエがなく、純粋な気持ちでトライしてくれている。そういう気持ち、持っていたいなって思う(キーボード奏者)。

・反応がダイレクトで、距離が近い。うれしいとか、踊りたいとか、反応がオープンであることがよい。自分自身、楽しくやれている。今はここに来たら楽しいことが待っている、という気持ちでいる。知り合いが近くに住んでいるが、こういう場所があることを知らなかった。スタッフも楽しんでくれるから、こちらも楽しくなる。3か月おきにこれがある、という状態になるとよい。ぜひ継続してもらいたいし、いろいろなところでやれるとよい(打楽器奏者)。

・利用者さんたちが僕たちの顔を覚えてくれているので、やりやすい。はじめましてじゃないので、だんだんやりやすくなっている。歌や踊りも本当は勇気がいることだと思うけど。終わった後に(利用者の男の子が自分の好きな曲を)リクエストしてくれたのもよかった。「言っていていいんだ」って思ってくれたんだ。この自由に言えるってこと、ごちゃまぜ音楽会がめざすところが体現されていたように思う(サクソフォン奏者)。

b. 企画を続けた効果

・のど自慢は一発勝負。一方通行ではなく、お互いに寄り添って合わせられるようになった、そういう技術が身に付いた。今後の演奏活動に役立つと思う(キーボード奏者)。

・最初はお互いすごく緊張していた。今は場が育ってきた。聴く人も「こんな感じ」と分かっている、迎え入れる聴き方をすると、安心感ができた。これを続けていったらもっといい形になるかも。ここでしか歌を披露していない人がいる、この場をなくしたくない。すぐにリベンジできる、そういう場を大切に

たい（打楽器奏者）。

・カラオケ大会のアイデアは継続したから出てきたと思う。スタッフさんから「こういうこともできるのでは」と提案していただいた。職員さんのアイデアがぼしとはまった。単発だとお客様扱い。今は交流して企画を作ることができているのかな（サクソフォン奏者）。

③施設職員への効果

グループインタビューの形で全体の感想をうかがった。

・音楽会は「聴きに行く」というものかと思っていたが、双方向というか、こういうふうに参加しよう！と思えるのがよい。毎回、ちょっとずつ変えていて、新しいものを入れようと考えている。自分を表現することが苦手な利用者も多いから、言葉以外の表現もできるように考えた。利用者さんこんな風を楽しんでいるんだとか、いつもと違う一面が見れたのが新鮮。

・前でMCしているので、皆の笑った顔とか、表情がよく分かる。楽しそうに歌ったり、楽器叩いているのを見て「よかったな」と思った。カラオケ企画も、最初は出てくれるか心配で、今回もぎりぎりまで声をかけていたが、たくさんの方が参加してくださった。コラボしようのコーナーも、他の家族のパフォーマンスを見て、自分も出してみようと思ってくれた人もいて、いい企画になったと思った。

・いろいろな参加の形があるのだと自分自身学びが多かった。歌の伴奏がすばらしい。プロの方に参加者を立てていただくことをお願いしてよいのかと思ったが、両方が重なっていいものを作ることができていて、プロだからこそそういう形に持っていけるんだ、すごいと感じた。お願いしてよかった。いろいろな利用者の才能に気付いた、この企画がなければ気づけなかった。

2) アンケート

今回こだわった「参加」に関する部分の指摘を確認する。

①利用者家族

・会場にいる皆さんがバンドの皆さんの曲とともに手拍子で楽しんでいらっしやっただのがとても一体感となり、すてきな時間でした。

・聴いているだけでなく参加という点がブラボー！

・「ごちゃまぜ」の意味が分かったような気がします。本人（利用者）も含め、いろんな人が参加できて楽しかったです。

②支援者

・しっとりと聞きたい人も、楽しくダンスしたい人も、誰も置いてけぼりにされない温かい音楽会でした。

・利用者さんにご家族、そのごきょうだいなど、いろんな形での参加がすてきだと思いました。

・定番になっている歌やダンス、3回目ともなると皆慣れてきて、より自分らしさを出しているなと思いました。

3. 研究結果のまとめ

今回の音楽会企画は利用者、ご家族、施設職員それぞれに効果をもたらすものであった。利用者に対する効果としては、イキイキと楽しむ機会の獲得、自分が輝ける場、賞賛を得られる場の確保、次の機会を楽しみに待ち準備する経験を得たことが挙げられる。家族に対する効果としては、音楽会が家族で安心して出かけることができる場となったこと、企画を通じて本人の新たな一面を知ることができたこと、アーティストに感心を持つなど、自分自身の楽しみを見つけたことが挙げられる。施設職員に対する効果としては、利用者理解&ご家族理解が進んだこと、日々の疲れの癒やしの場となったこと、そして企画立案の過程で組織としてのチーム力がアップしたことが挙げられた。

今後の展望

本研究を行うなかで、いくつかの課題が見えてきた。第一に、研究として適切な効果検証のあり方についてである。企画の内容上、尺度を用いた量的な分析は行いにくい。また、障害のある方が主な参加者であるため、インタビューやアンケートなどの研究手法を用いることが叶わず、データの収集に困難がある。しかし現象的、記述的には大きな効果が認められるため、今後、現場実践に添う効果検証の方法を見出していくことが課題となる。

その他、資金確保も重要な問題である。プロのアーティスト達に協力をお願いし、事業継続を目指すのであれば、謝礼の支払いは必須である。ただし先述したように、これまでの研究手法でエビデンスを出すのが難しい内容であることもあり、研究に対する助成金を得ることが難しい。今回、日本福祉大学から助成を受けることができなかつたら、企画の実施は困難であった。

最後に、本研究で得た知見を他の社会福祉法人や事業所の支援の質向上に活かしていく試みも必要である。アクションリサーチを行うなかで見出した取り組みや工夫については、ぜひ、多くの実践の場で活かしていきたいと考える。

謝辞

今回、日本福祉大学から地域連携型研究助成をいただくことにより、研究を実施することができました。ありがとうございました。また、本研究の実施にあたり、全面的にご協力くださいました社会福祉法人むそうの猪留寛子様、高松さくら様、篠原穂乃果様、ほか職員の皆様、そして素晴らしい演奏で音楽会を盛り上げてくださいましたアーティストの石川貴憲様、犬飼裕哉様、弓立翔哉様に心より御礼申し上げます。

参考文献

湯原悦子、石川貴憲（2022）「社会福祉領域における音楽アウトリーチの効果に関する探索的研究」 日本福祉大学社会福祉論集 147 pp. 59-80

file:///C:/Users/katoe/Downloads/fukushi 147-04yuhara. pdf